

五月人形商戦 本格化
男児の誕生を祝い健やかな成長を祈る歴史豊かな端午の節句
商戦の中心は15万円前後の「兜飾り」



煌びやかな五月人形（東京・浅草橋 吉徳本店）

風薫る「端午の節句」。五月人形を飾り男児の誕生をお祝いするとともに、その健やかな成長を願う奈良・平安時代由来のゆかしい伝統文化行事です。

三月に入り、本格的な五月人形商戦が始まっています。人形の総合企業・株式会社吉徳（111-8515 東京都台東区浅草橋 1-9-14、創業正徳元年・1711年、資本金1億円、社長：12世山田徳兵衛 <https://www.yoshitoku.co.jp/>）は、浅草橋本店をはじめとする全国10直営店舗にてお客様の五月人形選びをサポートする万全の体制を整えています。

端午の節句の由来と五月人形の役割

端午とは月の初めの午（うま）の日という意味で、古代中国では物忌みの月とされる五月最初の午の日に、家の邪気を祓うさまざまな行事を行いました。こうした風習が奈良時代に日本に伝わり、薬草の菖蒲やよもぎを家の内外に飾って無病息災を願ったのが我が国における端午の節句の始まりとされています。平安時代にはこの日、勇壮な武事がおこなわれ、民間でも子どもたちがこれにならって勇ましい遊びを楽しむようになり、当時宮廷では端午の節句が公の儀式とされていましたが、その後武家や民間でもこの日を祝うようになり、鎌倉・室町幕府も端午の節句を公の祝日としました。江戸時代になると五月五日は幕府の重要な式日の一つとなり、この日は大名や

旗本が江戸城に伺候するなど、また歴代の将軍は男子が生まれると城内に幟などを立てて祝うようになり、このころから端午の節句は男児の誕生の祝いと密接に結びつくようになりました。武家でも男児誕生の時は、自分の身を守る重要な道具である鎧兜や幟旗を飾ってその健やかな成長を祈りました。民間でもこれにならい、大きな作り物の兜や武者人形、幟旗を飾るようになりました。これらの飾りは当初、屋外に飾っていましたが、江戸時代中期以降、幟旗以外は小型化したものを屋内に飾るようになり、「座敷飾り」として普及しました。こうした当時の家内行事が現代の五月人形飾りのそもそもの始まりといわれています。

商戦の中心は「兜飾り」。15万円前後の程よいサイズが売れ筋

今期の商戦も「兜飾り」中心とみていますが、全般的に、お客様の目は“素材、作りとも高品質なもの、サイズは近年の住居事情を考慮し、ほどよいサイズといわれる間口50cm程度のコンパクト”に向いています。また、売れ筋価格は14万円～17万円(税込)と見込み、例年より若干下がるものと推測しています。五月人形のもう一つの定番は「鎧飾り」です。鎧飾りの特徴でもある髭の付いた面頬(めんぼお：顔面を防御する防具)。この髭が怖いという声にお応えし、新しいタイプの面頬を用いた鎧飾りを販売しています。静岡市駿河区・久能山東照宮博物館に所蔵されている金陀美具足を参考に制作したものです。新しい風を吹き込むと思われます。



《新型面頬》



《従来の面頬》



以上